

牛久：学校周辺に見る自然

第34号 稲敷市民農園

2011年8月25日発行

＜ 畑仕事のあいまに ～ 3. エノコログサをのぞいてみたら… ＞

市民農園での観察。今回は、アキノエノコログサやメヒシバなど、イネ科の雑草と、そこに来る虫たちに目を向けてみました。写真はすべて2011.8.6に撮影したものです。



アキノエノコログサの穂に、数匹のハチが集まっていました。ヒョウタンのような腹部の形に特徴があり、トックリバチの仲間というのはすぐに分かりました。図鑑を見ると似た仲間が何種類かいて、その中のキアシトックリバチでした。トックリバチの仲間は単独生活で巣も一匹でつくるのですが、この巣は自分が暮らすためのものではなく、外敵に無防備な卵や幼虫、蛹のためのものなのです。親自身は花の蜜を吸って暮らしますが、子のためにガの幼虫などを狩り、麻酔で仮死状態にして巣に運びこみ、入口にふたをして外敵の侵入を防ぎます。卵が孵化すると幼虫はそれを食べて育ちます。このようなハチを「狩人バチ」といいます。巣は直径1.5cmほどの球形で、えりのついた入り口の穴があり、まるで「とっくり」のように見えるところからトックリバチと名づけられたそうです。



アキノエノコログサの穂に集まるキアシトックリバチ(上)と、イヌビエの穂につくられた巣(下)



こちらは、同じく「狩人バチ」の仲間、ジガバチ。地中に巣穴をつくります。上のキアシトックリバチと、同じアキノエノコログサから出ている穂につかまっていたので死んでいるのかと思い、穂に手で触れてみたら、パッと飛び立ちました。いったい何をしていたのでしょね？

「狩人バチ」の仲間は意外とおとなしく、つかんだり、のぞき込んだりしなければ刺されることはないようです。が、ジガバチに刺された人の話では、かなり痛いそうなので、おこらせたりしないように気をつけましょう。ジガバチは細い体ですが、もしかしたら腹部の赤いもようは、「ちょっかい出すと痛い思いをするぜッ！」という警告のしるしなのかもしれませんね。

アキノエノコログサの穂につかまるジガバチ



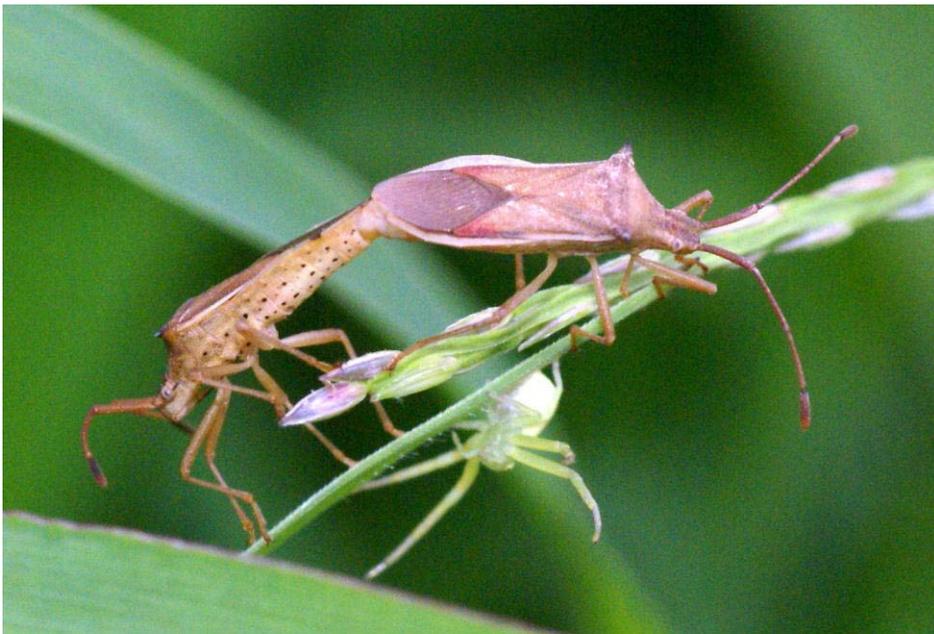
生い茂ったイネ科の草にまぎれて、じっとしているショウリョウバッタ

右は、カメムシを襲^{おそって}っているアリ…、ではありませんよ（実は、私も最初はそう思いました。）。よく見たら、アリではなくカメムシの幼虫です。しかも、図鑑^{ずかん}で調べたら、一緒^{いっしょ}に写っている成虫のカメムシとは、別の種類でした。一緒にいるから親子だろうと、また、先入観^{せんじゆかん}にだまされるところでした。

ハチとは逆に、まわりの草にとけこむようにして身をかかす虫たちもいます。このショウリョウバッタもそうです。これまで何度も登場していますが、イネ科の草に縦^{たて}にとまっているので、よけいに区別しにくくなっていました。まさに「自然のかかし絵」ですね。



メヒシバの穂にとまるホソハリカメムシ（茶色）とヨツボシヒョウタンナガカメムシ幼虫（黒色）



最後は、交尾中^{こうび}のホソハリカメムシを、ハナグモの幼体^{ようたい}が襲っているところです。30分以上、穂の上を行ったり来たりしていましたが、とうとう見ている間には、勝負はつきませんでした。

【理科支援員 宮内】

メヒシバの穂の上で交尾中のホソハリカメムシを襲うハナグモの幼体